

「サル真似」とコミュニケーション

「サル真似」という言葉がある。主体性や創造性に欠け、誰でもできる真似という意味である。しかしニホンザルの社会を見ると、確かに子ザルは、生きる知恵として、周囲の大人や子どもの真似をしながら成長するが、大人になったサルは決して別のサルの真似はしない。類人猿のチンパンジー社会でも似たようなことがわかってきた。どうも、「サル真似」はヒトだけに見られる行為のようだ。

明和政子・京都大学大学院教育学研究科教授（発達教育学）は、『Science Window』（2009年秋号）で、「生まれたばかりの赤ちゃんは、一人では何もできない無力な存在に感じますが、すでに他人の表情を模倣する能力をもっています。自分ではどこをどう動かせば舌が出るのかまだ分からないはずなのに、目の前でゆっくりと舌を出してみせると、赤ちゃんも同じように舌を出し、口を開けてみせればやはり口を開けるのです。」「不思議なことに、『新生児模倣』と呼ばれるこの模倣は生後2カ月ほどで消えてしまいます。でも、生後10カ月ぐらいから赤ちゃんは再びまねをし始めます。遊びの中で『おつむてんてん』や『あつかんべえ』を急にやり始めるのですが、その模倣は新生児のころとはまったく質が違います。楽しそうに声を出し、笑顔が見られる。お互いの気持ちが重なり合ったコミュニケーションになっているのです。こうした模倣が、自然発生的に出てくるのはヒトだけです。」と述べている。

生後2カ月ほどで消える「真似」は類人猿の遺伝子に組み込まれた本能的な営みで、生後10カ月以降に現れる「真似」はヒトに追加された遺伝子である。これが「模倣」や「サル真似」として、ヒトの本性を決定していくのである。人類の乳幼児は、「模倣」を通して家族間のコミュニケーションを図ろうとしているのではないだろうか。それは成長しても続き、社会におけるコミュニケーションの円滑化を促す重要なツールとなって、他者との「共感・共苦」や「絆」を産み出すのではないかと考える。

「笑い」の進化

正高信男・京都大学霊長類研究所教授は、朝日新聞の『Globe』（2016年2月7日）で、「サルは笑わない。喜怒哀楽の『喜』と『楽』の感情、おかしみの感情はない」と述べた。それは「硬いものをかむために側頭筋が非常に発達した結果、繊細な表情筋がつかない余りがなく、笑い顔をつくることができない」からだと考えた。すなわち、サルは側頭筋が非常に発達したことによって、笑顔に必要な表情筋が発達しなかったということになる。

さらに、正高教授はサルの二つの表情に注目した。一つは「grimace」という引きつり顔で、もう一つは、子どものサルがじゃれ合うときの「play face」である。前者はSmile（微笑）で、後者はLaugh（哄笑）である。いずれも緊張関係を解消するための手段で、人間の「愛想笑い」のようなものだと考えた。そして、「人間は見知らぬ人と出会い、緊張する場面を経験することが多いので、おのずと笑いが発達した」と考えた。

このように、Smileであれ、Laughであれ、笑いは、緊張関係を緩和するための手段として進化したということになる。

また、同じ朝日新聞の『Globe』には、苧阪直行・京都大学名誉教授（実験心理学）の「笑うと脳の内側前頭前野が活性化される。この部分は相手の心を理解する領域だ。ほとんどの笑いは相手があつてはじめて生まれるもの」、「笑いは他者との共感を生み出す社会的スキル」という記事も紹介された。そして、人間が笑う理由について、苧阪名誉教授は「社会の中で生きる人間はそもそも他者と共感したいという心理がある。気持ちが通い合うと愉快になり、笑うと心の結びつきはより強くなって、利他的な協力が可能になる。協調は社会を進歩させる。笑いは、豊かな社会を育む生存の方略だ」という仮説を立てた。

前出の正高教授によると、「多音節の発声を伴う笑い（laugh）はノドの形態が整ってくる生後4カ月ぐらいで出現し」、「これが『アババ』といった赤ちゃん特有の喃語（なんご）を発声するための準備になる」という。

つまり、乳幼児の笑いは、ヒトの発語においても重要な役割を果たすことを示唆している。ヒトとして生まれた赤子は、生後4カ月ぐらい経つと、コミュニケーションに必要な言語能力を少しずつ発揮するというのである。

すなわち、笑いは脳の内側前頭前野を活性化させ、緊張緩和を促し、他者と共感したいという心理効果を促す。また発語においても重要な役割を果たすということになる。いずれにおいても、「脳が喜ぶから笑う」というように考えることもできる。

「ヒト」への進化

今からおよそ3万年前、ヒト（Homo）属の人類に、ホモ・ネアンデルタレンシス（ネアンデルタール人）が絶滅した。絶滅した原因の一つに、現生人（ホモ・サピエンス）にはできて、ネアンデルタール人にはできなかった決定的な差があった。それは、言語による会話能力による差だったという。

今から7万年前に始まり1万年前まで続いた「ウルム氷期」、なかでも4万年前の地球は非常に寒い時期だった。それゆえ、厳しい寒さの中でコミュニケーションを図ることが不十分だったネアンデルタール人は、寒さに適応できず、突然、地球上から姿を消すことになったという。

ネアンデルタール人の喉頭隆起（通称、のど仏）は、現生人よりも高い位置にあったことから、話す能力やそのバリエーションは少なかったと考えられている。それが結果的に、会話能力やコミュニケーション不足となり、絶滅を誘引させたのではないかと研究者はみている。すなわち、会話力が現生人とネアンデルタール人の生死を分けた原因の一つだったことになる。

「真似」「笑い」「会話力」などが、ヒトとしての進化を促したのではないかと考える。

「おばあちゃん効果」

そもそも、人間は繁殖行動という基本的な行動でさえ、類人猿と大きく異なる。それが「多産型」であること。人間は年子も珍しくないが、チンパンジーやゴリラの出産間隔は4～5年と極めて長い。これは人類の祖先がアフリカの熱帯雨林を出たとき、草原地帯で天敵に襲われやすく、死亡率が高かったことへの生存戦略だと考えられている。その「多産型」を手助けする役割が、「おばあちゃん」にあるという。